

②福井達雨氏との出会い

よく知られているように、滋賀県・能登川にある止揚学園の創始者・福井達雨氏は重い知恵遅れの子供達と共に生きることを目指して、さまざまなそれこそハードルを乗り越えて止揚学園を創設されたわけですが、私が北海道の教会、神戸の教会で働いていた頃、よくお招きしてお話しを伺いました。室蘭の教会にいたときに講演会の後で、フロアから「障害をもった子どもを生まないようにするためにはどうしたらいいか」という質問がありました。そのとき福井氏はこう答えられたのです。

「いや、障がいを負う子どもは、ある社会的統計では、ある確率をもって生まれてきます。特に知的障がいや出産のときに起こりやすいのです。赤ちゃんが産産時、特に産道を通るときは非常に危機的な道を通じて分娩されるからです。ですから出産時には細心の注意をもって対処することによって、後遺症としての障がい避けられる可能性が有るでしょう。しかし、問題は、障がいを持つ子どもを生まないことではなく、統計的にはある確率を持って生まれてくる障がいを持つ子どもたちを、社会がどう受け入れるか、なのです。」と。

当時、障がいを持った子どもたちの存在は社会的に潜在していました。福井さんは言わばそういう、当時の言葉で言えば座敷牢に隠されていた子どもたちを探し出して、座敷牢から解放放つことから始められたわけで、言わば《潜在化》していた子どもたちを《顕在化》させたわけです。

彼は「統合教育」ということを提唱して、いわゆる特殊学級や養護学校に障がい児や虚弱児を分離的に入れることについて消極的に捕らえていました。私は当時、幼稚園の園長でもありましたので、この考えに共鳴して「統合保育」を目指し、幼稚園に障がいを持った子どもたちを積極的に受け入れるように努めました。そのことについては障がいをネガティブに捕らえず、むしろ福井氏の言葉によれば、一つのその人に固有な個性ととらえて、共に生活することを目指したのです。ですから、障がいをネガティブに捕らえる発言に対して私としては少し敏感に反応したのでした。

神戸の教会にいた時に、幼稚園に肢体運動機能障害の子どもが在園していました。秋の運動会になって、その子がどのようにして運動会に参加したらいいかが、教師会で問題となりました。そのとき、園長である私は、教会に備え付けの車椅子がありましたのでその車椅子にその子に乗せて、他の普通児が押して走つたらいいのでは、と提案しました。ところが本人は、それはイヤだということです。自分で走りたい、と言うのです。走る、というようなことはほとんど期待できない子どもですから、私たちは大変困りました。そして教師会でもう一度話し合いました。すると担任の教師は、本人が走りたと言っていることはとても大切なことだからその意志を尊重しなければならぬ。彼において走る、彼が走る、それでいいのではないか、勝つとか負けるとか、速いとか遅いというのは、我々の価値基準であって、その子においてはその子において走るといふことがあるのではないか、それを大事に

しよう、と提案しました。それで、運動会するとき彼はスタートラインに他の子供達と一緒に並びました。立つて並んだのではなく、俯けにねそべったのです。用意ドンで子供達はゴール目指して走りました。彼は動かせる両の手と足のわずかな運動力を精一杯使って這い始めました。もちろん、他の子供達はとっくにゴールしていました。走る距離にハンディキャップはつけませんでした。しかし彼はその距離を最後まで這い抜き、他の子供達も親たちも声の限りに応援したのです。ゴールと共に大きな拍手が沸き起こりました。彼は自分の走った距離に満足しました。

これは、特に美談ではありません。彼において走つたのであって、彼は目標を達成したのでした。当然のことでした。彼は他の子供達と共に走り、他の子供達も彼と共に走り、それは応援すべき当然の出来事であったのです。

いわゆる自閉症（自閉的傾向）のある子どもがいまいた。彼は保育室で他の子供達のように自己制御しながら保育を受けることは苦手でした。保育室をしばしば抜け出して、園長室に来ます。そしてソファの上でジャンプし、ソファの上を実にうまくわたり歩きます。トイレに逃げ込みます。トイレにあった障がい者用のトイレのために渡してあったカーテンレールに上手にバランスよくぶら下がります。時には園舎を抜け出して近くの公園に行ってしまう。私は自転車で周辺を捜し回ります。あるときどうしても見つかりませんでした。すると隣の家の人が、この子が家の押し入れの中で眠って居る、と知らせてくれました。彼は極めて

安全な場所で、あつたかく布団にくるまって眠っていたのです。この子を捜し回るために、担任の保育者もクラスの子どもたちもいわゆる通常の保育が成立しない状態でした。しかし、私は、この《混乱》が保育そのものだ、と思ったのです。常識的なレベルがなりたたないのは確かだけれども、この子どもたちのレベルにおいては、彼は自分の生活を成立させているのです。それを枠はずれと理解するとすれば、彼はこの共同的社会から排除されるばかりではなかったでしょう

か。